

引証資料

引証資料については各章ごとにまとめた。同じ文献であっても各章で使用したものを著者・執筆者毎に配列した。なお、著者不詳や特に定めがない場合には書名等をその代わりとして配列した。同一著者が複数の著作に関わる場合には適宜 a,b,c 等を氏名に後置し、発行年の古いものからアルファベット順とした。なお、『養生訓』については多くのものを使用するため、例として本文中では「原著者／現代語訳者」と表現しているため、原著書の発行年（1713）以降の表記について工夫した。

序 論

板坂耀子 a (1987). 「解説 湯けむりの中に」、板坂耀子編、『江戸温泉紀行』、平凡社。

板坂耀子校注 b (1991). 『壬申紀行』、叢書江戸文庫 17 近世紀行集成、国書刊行会。

板坂耀子 c (1993). 『江戸の旅と文学』、ペリカン社。

板坂耀子 d (2011). 『江戸の紀行文—泰平の世の旅人たち』、中央公論新社。

貝原益軒 (1713). 『養生訓』、伊藤友信訳 (1982). 『養生訓 全現代語訳』、講談社。

貝原益軒 e (1700). 『日本歳時記』、益軒会編 (1910)、『益軒全集』、卷之一、益軒全集刊行部。

貝原益軒 f (1709). 『大和本草』、益軒会編 (1911)、『益軒全集』、卷之六、益軒全集刊行部。

謝心範 a (2015). 「『養生訓』の分析研究—漢籍の影響」、博士論文。

https://www.musashino.ac.jp/mggs/wp/wpcontent/uploads/2021/01/hakase_sya_ketsuron.pdf. 2022年7月27日アクセス。

人見必大 b (1697). 『本朝食鑑』、島田勇雄訳注 (1981). 『本朝食鑑』、2、平凡社。

『料理物語』(1643). 江原恵 (1986). 『江戸料理史・考』、河出書房新社。

『料理物語』(1643). 吉井始子翻刻代表者 (1978). 『翻刻 江戸時代料理本集成、第7巻』、臨川書店。

第1章 貝原益軒の生涯

板坂耀子校注 b (1991). 『壬申紀行』、叢書江戸文庫 17 近世紀行集成、国書刊行会。

板坂耀子 c (1993). 『江戸の旅と文学』、ペリカン社。

板坂耀子 d (2011). 『江戸の紀行文—泰平の世の旅人たち』、中央公論新社。

伊藤友信 (1996). 「現代語訳の序にかえて—新しい益軒像と『慎思録』—」、貝原益軒 (1714). 『慎思録』、伊藤友信訳 (1996). 『慎思録』、講談社。

井上忠 (1963). 『貝原益軒』、吉川弘文館。

益軒会編 a (1911). 「益軒先生年譜」、『益軒全集』、卷之一、益軒全集刊行部。

益軒会編 b (1911). 「凡例」、『益軒全集』、卷之七、益軒全集刊行部。

益軒先生傳 (1979). 「益軒先生傳」、『貝原益軒』、下巻、日本教育思想大系、日本図書センター。

貝原益軒 (1713). 『養生訓』、伊藤友信訳 (1982). 『養生訓 全現代語訳』、講談社。

貝原益軒 b (1692). 『壬申紀行』、板坂耀子校注 b (1991). 『壬申紀行』、叢書江戸文庫 17 近世紀行集成、国書刊行会。

貝原益軒 d (1696). 『和州巡覧記』、益軒会編 (1911). 『益軒全集』、巻之七、益軒全集刊行部。

貝原益軒 g (1710). 『楽訓』、益軒会編 (1911). 『益軒全集』巻之三、益軒全集刊行部。

貝原益軒 h (1711). 『有馬山温泉記』、益軒会編 (1911). 『益軒全集』、巻之七、益軒全集刊行部。

貝原益軒 i (1714). 『慎思録』、伊藤友信訳 (1996). 『慎思録』、講談社。

折口信夫 (1927). 「ほうとす話」、折口博士記念古代研究所 (1982). 『折口信夫全集』、第 2 巻、中央公論社。

干航 (2006). 「中国の温泉文化について」、『温泉地域研究』、第 6 号、日本温泉地域学会。

九州大学九州文化史研究所内九州史料刊行会編(1956). 『玩古目録』、『延宝七年日記・日記五号 日記六号・玩古目録』、益軒資料二、臨川書店。

今野信雄 (1986). 『江戸の旅』、岩波書店。

桜井正信 (1993). 「現代に生きる用心集の心—解説にかえて—」、八隅蘆菴 (1810). 桜井正信監訳、『現代訳 旅行用心集』、八坂書房。

佐々木隆 a (2017). 『国際文化交流の行方』、後編、多生堂。

佐村八郎 (1904). 『国書解題』、吉川半七・林平次郎、増訂第 2 版。

澤田節子 (2011). 「貝原益軒の『養生訓』にみる健康術—セルフケアをめぐる—」、『東邦学志』、第 40 巻第 1 号、愛知東邦大学。

https://aichitoho.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=246&item_no=1&page_id=13&block_id=60. 2022 年 8 月 19 日アクセス。

柴田純 (2016). 『江戸のパスポート—旅の不安はどう解消されたか』、吉川弘文館。

島本昌一 (2010). 「益軒の『止戈編』について—益軒学の出発点—」、『近世文学研究』、第 2 号、懶祭堂。

瀧澤利行 (2001). 『養生の楽しさ』、大修館書店。

西村隆夫 (1997). 『旅する益軒『西北紀行』 山城・丹波・丹後・若狭・近江を巡る』、和泉書院。

西村享編 (1988). 「ほうとうとした気分」、『折口信夫事典』、大修館書店。

額田年 (1963). 『歴史からみた養生訓』、雪華社。

深井甚三 (1997). 『江戸の旅人たち』、吉川弘文館。

福岡市博物館・特別展示解説 (2014). 「貝原益軒没後 300 年・亀井南冥没後 200 年記念 益

軒・南冥と筑前の学者たち 2014年12月9日～2015年1月18日 特別展示室B」(貝原益軒略年譜 表1)。なお、頁表記はない。

http://museum.city.fukuoka.jp/archives/exhibition/2014/ekiken_nanmei/pdf/ekiken_nanmei-leaflet.pdf. 2022年8月24日アクセス。

松田道雄(1969)。「貝原益軒の儒学」、松田道雄編、『貝原益軒』、日本の名著14、中央公論社。

溝口周道(2002)。「近世の観光に与えた貝原益軒の紀行文の特徴」、『ランドスケープ研究』、第65巻第5号、日本造園学会。

宮本常一(1969)。「探検・紀行・地誌 西國篇 序」、宮本常一他編、『日本庶民生活史料集成』、第2巻、三一書房。

安田相郎(1838)、『大和巡日記』、廣江清(1969)、『大和巡日記』、宮本常一他編、『日本庶民生活史料集成』、第2巻、三一書房。

楊彪b(2020)。「貝原益軒のフィールドワークから見た『養生訓』—温泉を中心に—」、『武蔵野学院大学大学院研究紀要』、第13輯、武蔵野学院大学。

吉田光邦(2021)、『江戸の科学者』、講談社。

第2章 『養生訓』の成立過程

足立栗園(1902)、『近世立志傳』、第2 貝原益軒、積善館。

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/777678/15?tocOpened=1>. 2022年8月19日アクセス。

井上忠(1963)、『貝原益軒』、吉川弘文館。

岩間眞知子a(2019)。「お茶と養生」、『日本健康学会誌』、第85巻第1号、日本健康学会。

岩間眞知子b(2020)、『喫茶の歴史 茶葉同源をさぐる』、大修館書店。

益軒先生傳(1979)。「益軒先生傳」、『貝原益軒』、下巻、日本教育思想大系、日本図書センター。

貝原益軒(1713)、『養生訓』、伊藤友信訳(1982)、『養生訓 全現代語訳』、講談社。

貝原益軒(1713)、『養生訓』、城島明彦訳(2015)、『養生訓』、致知出版社。

貝原益軒a(1682)、『頤生輯要』、益軒会編(1911)、『益軒全集』巻之七、益軒全集刊行部。

貝原益軒f(1709)、『大和本草』、益軒会編(1911)、『益軒全集』、巻之六、益軒全集刊行部。

郭崇(2019)。「『大和本草』の出典研究—『本草綱目』との比較を中心に」、博士論文。

片渕美穂子(2018)。「近世中期養生思想における導引術—貝原益軒『頤生輯要』を中心に—」、『杏雨』、第21号、公益財団法人武田科学振興財団。

木村陽二郎(1977)、『日本自然誌の成立』、中央公論社。

謝心範(2018)、『養生の智慧と気思想 貝原益軒に至る未病の文化を読む』、講談社。

澤田節子(2011)。「貝原益軒の『養生訓』にみる健康術—セルフケアをめぐる—」、『東邦学志』、第40巻第1号、愛知大学東邦大学。

https://aichitoho.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_

view_main_item_detail&item_id=246&item_no=1&page_id=13&block_id=60. 2022
年 8 月 19 日アクセス。

- 高橋 碩一 (1984). 「本草学」、西山松之助他編、『江戸学事典』、弘文堂。
- 田中佩刀 (1985). 「貝原益軒の『養生訓』に就いて」、『明治大学教養論集』、第 179 号、明治大学教養論集刊行会。
- 人見必大 a (1697). 『本朝食鑑』、島田勇雄訳注 (1981). 『本朝食鑑』、1、平凡社。
- 松田道雄 (1969). 「貝原益軒の儒学」、松田道雄編、『貝原益軒』、日本の名著 14、中央公論社。
- 宮崎綾子 (1997). 「貝原益軒抄出 竹田定直編成『頤生輯要』粗読拙訳—その 8—」、『漢方の臨床』、第 44 巻第 6 号、東亜医学協会。
- ※第 42 巻第 5 号 (1995 年 5 月) ~ 第 48 巻第 7 号 (2001 年 7 月) まで 24 回で完結しているもの参照。
- 麥谷邦夫 a (1995). 「中国養生文化の伝統と益軒」、横山俊夫編、『貝原益軒 天地和楽の文明学』、平凡社。
- 麥谷邦夫 b (2004). 「竹中通庵『古今養性録』と貝原益軒『頤生輯要』『養生訓』」、宮澤正順博士古稀記念論文集刊行会編、『東洋—比較文化論集—』、青史出版。
- 諸橋轍次 (2018). 『大漢和辞典』、巻 12、大修館書店。

第 3 章 『養生訓』の構成

- 石川謙校訂 (1984). 「解説」、『養生訓・和俗童子訓』、岩波書店。
- 板坂耀子 c (1993). 『江戸の旅と文学』、ペリカン社。
- 伊藤友信 (1996). 「現代語訳の序にかえて—新しい益軒像と『4 思録』—」、貝原益軒 (1714). 『慎思録』、伊藤友信訳 (1996). 『慎思録』、講談社。
- 鶴殿長快 (1816). 『肝要工夫録』、小泉吉永編 (2010). 『近世町人思想集成』、第 11 巻、クレス出版。
- 大田晴軒 (1865). 『訓蒙浅語』、日本随筆大成編集部 (1977). 『日本随筆大成』、第三期 8、吉川弘文館。
- 貝原益軒 e (1700). 『日本歳時記』、益軒会編 (1910). 『益軒全集』、巻之二、益軒全集刊行部。
- 貝原益軒 f (1709). 『大和本草』、益軒会編 (1911). 『益軒全集』、巻之六、益軒全集刊行部。
- 貝原益軒 j (1714). 『慎思録』、益軒会編 (1911). 『益軒全集』、巻之二、益軒全集刊行部。
- 貝原益軒 k (1716). 『文訓』、塚本哲三編 (1927). 『益軒十訓』、下、有朋堂書店。
- 郭崇 (2019). 「『大和本草』の出典研究—『本草綱目』との比較を中心に」、博士論文。
<http://opac.daito.ac.jp/repo/repository/daito/52639/>. 2022 年 9 月 29 日アクセス。
- 加藤曳尾庵 (1752-1825). 『我衣』、谷川健一編 (1971). 『日本庶民生活史料集成』、第 15 巻、都市風俗、三一書房。

- 新沢杜口 (1763-1764). 『翁草』、日本随筆大成編集部 (1978). 『日本随筆大成』、第三期 20、吉川弘文館。
- 斉藤康雄 (2012). 「識字能力・識字率の歴史的推移—日本の経験」、『国際教育協力論集』、第 15 巻第 1 号、広島大学教育開発国際協力研究センター、。
- 澤田節子 (2011). 「貝原益軒の『養生訓』にみる健康術—セルフケアをめぐる」、『東邦学志』、第 40 巻第 1 号、愛知大学東邦大学。
https://aichitoho.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=246&item_no=1&page_id=13&block_id=60. 2022 年 8 月 19 日アクセス。
- 志賀南岡 (成立不明). 『所聞録』、森銑三他編 (1981). 『随筆百花苑』、第 15 巻、中央公論社。
- 島田勇雄訳注 (1981). 「解説 1 『本朝食鑑』の著述まで」、『本朝食鑑』、1、平凡社。
- 謝心範 a (2015). 「『養生訓』の分析研究—漢籍の影響」、博士論文。
https://www.musashino.ac.jp/mggs/wp/wp-content/uploads/2021/01/hakase_sya_2.pdf. 2022 年 8 月 21 日アクセス。
- 新村出編 (2018). 『広辞苑』、岩波書店。
- 新村拓 (2006). 『健康の社会史—養生、衛生から健康増進へ』、法政大学出版局。
- 高橋敏 a (1999). 『近代史の中の教育』、岩波書店。
- 高橋敏 b (2007). 『江戸の教育力』、筑摩書房。
- 瀧澤利行 (2001). 『養生の楽しさ』、大修館書店。
- 竹田定直 (1716). 「文訓序」、塚本哲三編 (1927). 『益軒十訓』、下、有朋堂書店。
- 立川昭二 a (2001). 『養生訓に学ぶ』、PHP 研究所。
- 田中ちた子・田中初夫編 (1971). 『家政学文献集成続編』、江戸期 I、渡辺書店。
- 諦忍上人 (1763-1764). 「以呂波問辨」、福井久蔵編 (1939). 『国語学大系』、第 7 巻、厚生閣。
- 頓宮咲月 (1730). 『家内用心集』、小泉吉永編 (2010). 『近世町人思想集成』、第 4 巻、クレス出版。
- 西平直 (2021). 『養生の思想』、春秋社。
- 日本随筆大成編集部 a (1978). 『日本随筆大成』、第三期 20、吉川弘文館。
- 日本随筆大成編集部 b (1978). 「翁草解題追補」、『日本随筆大成』、第三期 24、吉川弘文館。
- 額田年 (1963). 『歴史からみた養生訓』、雪華社。
- 原念斎 (1816). 『先哲叢談』、塚本哲三編 (1923). 『先哲叢談』、有朋堂書店。
- 原田信男 (2014). 『江戸の食文化—和食の発展とその背景』、小学館。
- 福井久蔵編 (1939). 「解題」、『国語学大系』、第 7 巻、厚生閣。

福光由布 (2009). 「貝原益軒『養生訓』に見られる「養生」と「楽」」、『藝術研究』、第 21・22 号、広島芸術学会。

https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/3/31398/20141016181351997856/AnnuRev-HiroshimaSoc-SciArt_21_73.pdf. 2022 年 9 月 19 日アクセス。

松田道雄 (1969). 「貝原益軒の儒学」、松田道雄編、『貝原益軒』、日本の名著 14、中央公論社。

三井高陽 (1941). 『町人思想と町人考見録』、日本放送出版協会。

宮野弘樹 (2008). 「「民生日用の学」貝原益軒」、石瀧豊美監修、『図説 福岡・宗像・糸島の歴史』、郷土出版社。

山中芳和 a (2011). 「貝原益軒における「民生日用」に資する学問と教育論の展開 (1) — 格物窮理の工夫と有用の学—」、『岡山大学大学院教育学研究科研究収録』、第 136 号、岡山大学大学院教育学研究科。

山中芳和 b (2011). 「貝原益軒における「民生日用」に資する学問と教育論の展開 (2) — 『家訓』にみられる家意識と教育の問題を中心に—」、『岡山大学大学院教育学研究科研究収録』、第 148 号、岡山大学大学院教育学研究科。

横田冬彦 (1995). 「益軒本の読者」、横山俊夫編、『貝原益軒 天地和楽の文明学』、平凡社。

第 4 章 奈良茶

伊東蘭州 (詳細不明). 『墨水消夏録』、岩本佐七編 (1907). 『燕石十種』、第 1、国書刊行会。

※国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991268>

2022 年 9 月 16 日アクセス。

井原西鶴 (1693). 『西鶴置土産』、富士昭雄校注、『武道伝来記 西鶴置土産 万の文反古 西鶴名残の友』、新日本古典文学大系 71、岩波書店。

穎原退蔵 (2008). 『江戸時代語辞典』、角川学芸出版。

大木陽堂 (1936). 『現代語譯貝原益軒養生訓』、教材社。

大蔵永常編 (1885). 『日用助食 竈の賑ひ』、東京屋。

※国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/849008/1/13>

2023 年 2 月 27 日アクセス。

岡崎桂一郎 (1913). 『日本米食史』、臨時脚気病調査会。

岡田哲 (2013). 『食べ物起源事典日本編』、筑摩書房。

奥村彪生・福田浩監修 (1985). 「日本料理基本用語事典」、奥村彪生・福田浩編、『日本料理秘伝集成』、第 19 卷、同朋舎出版。

帯津良一編著 (2020). 『図解雑学 養生訓』、ナツメ社。

貝原益軒 d (1696). 『和州巡覧記』、益軒会編 (1911)、『益軒全集』、卷之七、益軒全集刊行部。

- 貝原益軒 f (1709). 『大和本草』、益軒会編 (1911)、『益軒全集』、卷之六、益軒全集刊行部。
- 貝原益軒 (1713). 『養生訓』、上村勝彌編 (1931). 『大日本思想全集』、第 5 卷、大日本思想全集刊行会。
- 貝原益軒 (1713). 『養生訓』、伊藤友信訳 (1982). 『養生訓 全現代語訳』、講談社。
- 貝原益軒 (1713). 『養生訓』、杉靖三郎編 (1982). 『養生訓』、徳間書店。
- 貝原益軒 (1713). 『養生訓』、松田道雄編 a (1982). 『貝原益軒』、中央公論社。
- 貝原益軒 (1713). 『養生訓』、松田道雄訳 b (1985). 『貝原益軒養生訓』、中央公論社。
- 貝原益軒 (1713). 『養生訓』、松宮光伸訳 (2000). 『口語養生訓』、日本評論社、
- 貝原益軒 (1713). 『養生訓』、すずや編集部 (2002). 『貝原益軒 養生訓』、すずや。
- 貝原益軒 (1713). 『養生訓』、森下雅之訳 (2006). 『養生訓 現代文』、原書房。
- 貝原益軒 (1713). 『養生訓』、工藤美代子 (2006). 『自由訳・養生訓』、洋泉社。
- 貝原益軒 (1713). 『養生訓』、城島明彦訳 (2015). 『養生訓』、致知出版社。
- 各務支考 (1719). 『俳諧十論』、加藤咄堂編 (1931). 『国民思想叢書』、必要篇、国民思想叢書刊行会。
- ※著者名については「解題」では「支考」、「序」には「本華坊」とあるがここでは本名の「各務支考」で配列した。
- 加藤純一 (1999). 「“帰化”文化と奈良“茶”文化」、『FOOD Sytle21』、第 3 巻第 1 号、食品化学新聞社。
- 加藤幸治 (2014). 「茶粥考—主食品をめぐる食事文化のローカリティー」、『東北学院大学論集』、歴史と文化、第 52 号、東北学院大学。
- 河内屋可正 (1700 頃). 『河内屋可正旧記』、野村豊・油井喜太郎編 (1988). 『河内屋可正旧記』、清文堂史料叢書第 1 刊、清文堂出版。
- 喜多村筠庭 (1830). 長谷川強他校訂 (2005). 『嬉遊笑覧』、第 4 巻、岩波書店。
- 黒木喬 (1987). 「明暦の大火」、小木新造他編、『江戸東京学事典』、三省堂。
- 越谷吾山編 (1775). 『物類称呼』、東條操校訂者 (1977). 『物類称呼』、岩波書店。
- 近藤宏二 (1984). 『養生訓』、三笠書房。
- 笹川臨風・足立勇 (1973). 『日本食物史』、下、雄山閣出版。
- 佐々木隆 b (2022). 「『養生訓』を読む—奈良茶に注目してみる—」、『高齢社会と地域』、第 3 号、高齢社会研究会。
- 佐々木隆・楊彪 (2022). 「江戸の食文化—奈良茶を巡って—」、『高齢社会と地域』、第 4 号、高齢社会研究会。
- 佐竹秀雄 (2007). 「『炊く』と『煮る』—生き残る表現—」、『食文化誌ヴェスタ』、第 65 号、味の素食の文化センター。
- 佐藤勝明 (2004). 「『むさしぶり』発句試解 (下)」、『和洋女子大学紀要』、人文系編、第 44 集、和洋女子大学。
- 鹿谷勲 (2021). 『茶粥・茶飯・奈良茶碗—全国に伝播した「奈良茶」の秘密』、淡交社。

- 宋倉有紀 (2021). 「江戸時代における「茶飯」食の展開」、『伝承文化研究』、第 18 号、國學院大學伝承文化学会。
- 島崎とみ子 (1987). 「『名飯部類』を主とした内容分析からみた江戸時代後期の米飯料理」、『女子栄養大学紀要』、第 18 号、香川栄養学園。
- 社団法人中小企業診断協会奈良支部(2008). 『奈良の食文化についての実態調査報告書 奈良漬・茶粥の魅力度向上策の提言』、社団法人中小企業診断協会奈良支部。
- 小学館国語辞典編集部編集委員会 a(1972). 『日本国語大辞典』、第八卷、第二版、小学館。
- 小学館国語辞典編集部編集委員会 b(1972). 『日本国語大辞典』、第十卷、第二版、小学館。
- 新村出編 (2018). 『広辞苑』、第 7 版、岩波書店。
- 清博美・谷田有史 (2017). 『江戸川柳で読み解くお茶』、水曜社。
- 立川昭二 b (2005). 『すらすら読める養生訓』、講談社。
- 田中敏子 (2001). 『大和の味』、改訂版、奈良新聞社。
- 谷本陽蔵 (2001). 「茶粥考」、『茶の文化』、第 1 号、静岡県茶文化振興協会。
- 下中弘編 (1988). 『世界大百科事典』、6、平凡社。
- 杉野権兵衛(1802). 福田浩・島崎とみ子訳(1982)『名飯部類 原本現代訳』、教育社新書。
- 長友千代治編 a (2018). 『江戸時代生活文化事典—重宝記が伝える江戸の智慧』、上巻あ～さ行、勉誠出版。
- 長友千代治編 b (2018). 『江戸時代生活文化事典—重宝記が伝える江戸の智慧』、下巻た～わ行、勉誠出版。
- 中西祐行 (1992). 「大和茶粥」、『経済往来』、第 44 卷第 4 号、経済往来社。
- 中村幸平 (2004). 『新版・日本料理語源集』、旭屋出版。
- 中村羊一郎 a (1992). 『茶の民俗学』、名著出版。
- 中村羊一郎 b (2000). 「ちやがゆ」、福田アジオ他編、『日本民俗大辞典』、下、吉川弘文館。
- 中村羊一郎 b. (2000). 「ちやづけ」、福田アジオ他編、『日本民俗大辞典』、下、吉川弘文館。
- 成瀬宇平 (2009). 『47 都道府県・伝統食百科』、丸善。
- 日本伝統食品研究会編 (2007). 『日本の伝統食品事典』、朝倉書店。
- 橋爪信子 (2019). 「奈良茶飯屋」、京都和食文化研究センター・日本食文化史研究会編、「日本食文化史研究の基礎的史料について」、『京都府立大学学術報告』、人文、第 71 号、京都府立大学。
- 林屋辰三郎他編(1990). 『角川茶道大事典』、角川書店。
- 早川史子 (2003). 「茶および茶がゆの研究」、『日本食生活学会誌』、Vol.14、No.1、日本食生活学会。
- 人見必大 a. 島田勇雄訳(1982). 『本朝食鑑』、1、平凡社。
- 人見必大 b. 島田勇雄訳(1981). 『本朝食鑑』、2、平凡社。

- 淵之上康元・淵之上弘子（1999）.『日本茶全書—生産から賞味まで—』、農村漁村文化協会。
- 牧村史陽編（2004）.『新版大阪ことば事典』、講談社。
- 松村明編（2019）.『大辞林』、第四版、三省堂。
- 松下幸子・吉川誠次・山下光雄（1988）.「古典料理の研究（十三）—『黒白精味集』について」、『千葉大学教育学部研究紀要』、第36巻、第2部、千葉大学教育学部。
<https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900025158/>、2022年9月26日アクセス。
- ※『黒白精味集』については下記の松下幸子 a（2009）より当初確認したが、原文からの詳細な研究をしている論文からの引用とした。
- 松下幸子 a（2009）.『図説 江戸料理事典 新装版』、柏書房。
- 松下幸子 b（2012）.『江戸料理読本』、筑摩書房。
- 南廣子 a（1990）.『茶茶茶』、淡交社。
- 南廣子 b（2017）.「茶粥」、大森正司他編（2017）.『茶の事典』、朝倉書店。
- 宮武正道（1932）.『奈良茶粥』、山本書店。
- ※本書は国立国会図書館に所蔵されていないが、インターネット検索によれば、奈良県立図書館情報館だけに所蔵されている。著作権等がすでに消滅しているため、全冊コピーで取り寄せた。『奈良茶粥』、よろづ叢書、宮武正道著、山本書店、1932/7、所蔵：書庫1914.6-518 禁帯出。なお、写真は表紙のカラーコピーされたものである。
- 三好一光編（2004）.『江戸語事典』、青蛙房。
- 『料理物語』（1643）.吉井始子翻刻代表者（1978）.『翻刻 江戸時代料理本集成、第7巻、臨川書店。
- 『料理物語』（1643）.江原恵（1986）.『江戸料理史・考』、河出書房新社。
- 元山荻舟（2012）.『飲食事典』、下巻、平凡社。
- 森無黄（1942）.『無黄遺稿』、第3巻、無黄遺稿刊行会。
- 森下比出子（1997）.「郷土食の成立と伝承—紀州の茶粥—」、『和歌山大学教育学部紀要』、教育科学、第47集、和歌山大学教育学部。
- 冷月庵谷水(1773).『料理伊呂波庖丁』、吉井始子翻刻代表者（1980）.『翻刻 江戸時代料理本集成、第7巻、臨川書店。
- 吉原健一郎（1984）.「火事」、西山松之助他編、『江戸学事典』、弘文堂。
- 楊彪 a（2019）.「『養生訓』における「茶粥」と「汲み湯」の記述に関する一考察」、『武蔵野学院大学大学院研究紀要』、第12輯、武蔵野学院大学。
- 楊彪 c（2021）.「『養生訓』に描写された奈良茶に関する一考察」、『武蔵野学院大学大学院研究紀要』、第14輯、武蔵野学院大学。
- 吉田光邦（2021）.『江戸の科学者』、講談社。
- 柳原尚之（2015）.『江戸から伝わる味をたずねて』、池田図書。
- 山田新市（2007）.『江戸のお茶—俳諧、茶の歳時記』、八坂書房。

第5章 温泉

温海町史編さん委員会編 (1978). 『温海町史』、上巻、温海町 (山形県)。

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9537597?tocOpened=1>. 2022年9月19日アクセス。

石井猛 (2016). 「温泉地の歴史と温泉の元祖分析法」、『温泉研究会ニュース』、第2号、立命
化友会・温泉研究会。

板坂耀子 a (1987). 「解説 湯けむりの中に」、板坂耀子編、『江戸温泉紀行』、平凡社。

板坂耀子 c (1993). 『江戸の旅と文学』、ペリカン社。

大塚吉則 (2012). 「漢方と温泉—温泉医学的考察—」、『日本東洋医学雑誌』、第63巻第3号、
日本東洋医学会。

小澤清躬 (1938). 『有馬温泉史話』、五典書院。

貝原益軒 (1713). 『養生訓』、伊藤友信訳 (1982). 『養生訓 全現代語訳』、講談社。

貝原益軒 c (1694). 『豊国紀行』、谷川健一編 (1973). 『日本庶民生活史料集成』、第二巻、
探検・紀行・地誌 (西国篇)、三一書房。

※筑紫豊「豊国紀行 解説」(p.478)によれば、森平太郎編『大分県紀行文集』(別府温泉
化学研究所、1936年4月)に初めて収載され、刊行された。

貝原益軒 f (1709). 『大和本草』、益軒会編 (1911). 『益軒全集』、巻之六、益軒全集刊行部。

<https://dl.ndl.go.jp/pid/992415/1/35>. 2023年3月19日アクセス。

貝原益軒 h (1711). 『有馬山温泉記』、益軒会編 (1911). 『益軒全集』、巻之七、益軒全集刊
行部。

神崎宣武 (2006). 「日本温泉文化史」、『水の文化』、第22号、ミツカン水の文化センター。

日下裕弘 (1995). 「日本の湯治 (その1) : <気>思想の日本化」、『茨城大学教養部紀要』
第28号、茨城大学教養部。

今野信雄 (1986). 『江戸の旅』、岩波書店。

坂本太郎他校注 (1986). 『日本書紀』、下、日本古典文学大系63、岩波書店。

謝心範 a (2015). 「『養生訓』の分析研究—漢籍の影響」、博士論文。

https://www.musashino.ac.jp/mggs/wp/wpcontent/uploads/2021/01/hakase_sya_hyo2_hyo4.pdf. 2022年8月8日アクセス。

鈴木一夫 (2014). 『江戸の温泉三昧』、中央公論新社。

高橋昌彦 (2002). 「『温泉考』—翻字と解題—」、『雅俗』、第9号、九州大学文学部国語国文
学研究室。

高橋陽一 (2016). 『近世旅行史の研究—信仰・観光の旅と旅先地域・温泉—』、
清文堂出版。

田中芳男編、竹中邦香校 (1891). 『有馬温泉誌』、田中芳男。

原雙 (1794). 『温泉考』、小笠原眞澄・小笠原春夫編 (2002). 『訓解温泉考』、文化書房博文
社。

- 人見必大 a (1697). 『本朝食鑑』、島田勇雄訳注 (1981). 『本朝食鑑』、1、平凡社。
編集部 (2006). 「文化をつくる 温泉の効用?」、『水の文化』、第 22 号、ミツカン水の文化センター。
八岩まどか (1993). 『温泉と日本人』、青弓社。
八隅蘆菴 (1810). 『旅行用心集』、桜井正信監訳 (1993). 『現代訳 旅行用心集』、八坂書房。

結 論

- 板坂耀子 a (1987). 「解説 湯けむりの中に」、板坂耀子編、『江戸温泉紀行』、平凡社。
板坂耀子校注 b (1991). 『壬申紀行』、叢書江戸文庫 17 近世紀行集成、国書刊行会。
板坂耀子 c (1993). 『江戸の旅と文学』、ペリカン社。
板坂耀子 d (2011). 『江戸の紀行文—泰平の世の旅人たち』、中央公論新社。
貝原益軒 b (1692). 『壬申紀行』、板坂耀子校注 b (1991). 『壬申紀行』、叢書江戸文庫 17 近世紀行集成、国書刊行会。
貝原益軒 e (1700). 『日本歳時記』、益軒会編 (1910)、『益軒全集』、卷之一、益軒全集刊行部。
貝原益軒 f (1709). 『大和本草』、益軒会編 (1911)、『益軒全集』、卷之六、益軒全集刊行部。
貝原益軒 (1713). 『養生訓』、伊藤友信訳 (1982). 『養生訓 全現代語訳』、講談社。

貝原益軒に関する年表

- 益軒会編 a (1911). 「益軒先生年譜」、『益軒全集』、卷之一、益軒全集刊行部。
福岡市博物館・特別展示解説 (2014). 「貝原益軒没後 300 年・亀井南冥没後 200 年記念 益軒・南冥と筑前の学者たち 2014 年 12 月 9 日～2015 年 1 月 18 日 特別展示室 B」(貝原益軒略年譜 表 1)。なお、頁表記はない。
http://museum.city.fukuoka.jp/archives/exhibition/2014/ekiken_nanmei/pdf/ekiken_nanmei-leaflet.pdf. 2022 年 8 月 24 日アクセス。
溝口周道 (2002). 「近世の観光に与えた貝原益軒の紀行文の特徴」、『ランドスケープ研究』、第 65 巻第 5 号、日本造園学会。